

紀小竹組 「音頭」の歌詞

紀小竹組では、歌の呼び名として「音頭」を用いていたので、タイトルの表記を「音頭」としている。

ここに示す歌詞は、調査の際に「得意な歌」「グループ独自の歌」「雰囲気を考えて歌う歌」などと依頼して、歌われた歌の歌詞である。

『伊勢音頭調査報告書』の中の「御坊祭の〈伊勢音頭〉」（以下、「報告書本文」）では、歌われた歌詞の「歌い出し」を記すことで表7にまとめ、歌詞の概観を行った。表7では、歌のふしの種類によって、「短い歌」「ながうた（紀小竹組では、長い歌の呼び名として「ながうた」という独自の呼び名がある）」「つなぎ歌（引き継ぎ歌、受け取り歌）」をまとめて示したが、ここでは、収録の際の歌われた順に示している。（歌のふしの種類については、「報告書本文Ⅱの表3」参照）。

なお、表記は、歌詞は黒字で、囃しことばは、音頭取りを赤字で、乗り子を青字で行っている。

歌詞のみ（囃し無）

◎歌い手（昭和50年生）

短い歌：お伊勢詣りで この子ができて お名をつけましょ 伊勢松と

ながうた：ここのお家（うち）は お花の家（うち）で 父は蓮華の花と咲き 母は芍薬姉牡丹 妹（いもと）吉野の八重桜 兄は何かと問うたなら 五月野に咲く百合の花

ながうた：娘十七、八 嫁入り頃で 娘今度の嫁入りに 簞笥長持ち銚み箱 船に着物もどっさりと それだけ持たせてやるからにゃ 二度と帰ると思うなよ そこで娘の言うことにゃ 父さん母さんそりゃ無理よ 千石積んだる船でさえ 西が曇れば雨とやら 東が曇れば風とやら 港を出るときゃまともでも 風の吹きよで 出て戻る

◎歌い手（昭和52年生）

短い歌：おまえ百まで わしゃ九十九まで とともに白髪の 生えるまで

短い歌：鯉の瀧登り なんとというて登る お水恋しと いうて登る

短い歌：行たら（いたら）見てこい 名古屋のお城は 金の鯨 雨ざらし

◎歌い手（昭和52年生）

短い歌：恋し恋しと 鳴く蟬よりも 鳴かぬ蜩が 身を焦がす

ながうた：夕べ見た夢は 目出たい夢だ 真白き鼠が三（みつ）連れて 三つ（みつつ）連れて六（むつ）連れて 小判くわえて金倉（かなぐら）へ 入るところを 夢に見た

ながうた：家（うち）の床の間の かけたる掛け軸梅の木に 梅の木鶯巣を作り 十二

の卵を産み揃え 十二が一度に目を覚まし 十二が一度に立つときは 金銀
盃酒注(つ)いで 飲めよ大黒さん 歌えよえべすさん 中で酌する 福の神

◎歌い手(平成3年生)

短い歌: 立てば芍薬 座れば牡丹 歩く姿は 百合の花

ながうた: 蒸気波の上 汽車鉄の上で 雷様は雲の上 浦島太郎は亀の上 猫の色事屋
根の上 あなたとわたしは 寝床の上

ながうた: 紀州紀の国は 名所の国だ 音に名高き和歌山城 遙かに眺むる生石山 中
に花咲く温山荘 花は桜の紀三井寺 ちりりて流れる紀ノ川へ 北は和歌浦
南には 日本一なる那智の滝 朝な夕なの陽を浴びて 紅葉映すか瀬八丁
金波銀波の波越えて 三段壁(べき)なら白浜で かもめ遊ぶか田辺湾 千鳥
通うか鰹島 高野(こうや)の峰より日高郡 百十万は梅の里 男紀文は蜜柑
船 黒潮寄せる日の岬 煙たなびく煙樹ヶ浜(えんじゅはま) 安珍恋しや道
成寺 恋に身を焼く清姫の 燃えて流れる 日高川

歌詞（囃し有）

◎歌い手（昭和 50 年生）

ヨーイヤッサイ

ヨーイヤッサイ

サーヨーイナーエ伊勢詣りでヨ ヨイヨイ エーこの子がヨできてヨ サーヨーイセー
コラセ ソリャー お名をつけましょヨーイソーレ 伊勢松とヨ ソーラヤートコセ
エエヨーイヤナ ソリャ ハリバンヨーイ コレバンヨイ ソラヤーイートセ

サーヨーイナーエここのお家（うち）はヨ ヨイヨイ エーお花のヨ家（うち）でヨ サ
ーヨーイセーコラセ ソレー父は蓮華の花と咲き ソーレ 母は芍薬姉牡丹 ソーレ
妹（いもと）吉野の八重桜 ソーレ 兄は何かと問うたなら ソーレ 五月ナヨーエ野
に咲くヨーイソーレ 百合の花ヨ ソーラヤートコセ エエヨーイヤナ ソリャ ハ
リバンヨーイ コレバンヨイ ソラヤーイートセ

サーヨーイナーエ娘十七、八 ヨイヨイ エー嫁入り頃でヨ サーヨーイセーコラセ
ソレー娘今度の嫁入りに ソーレ 箆笥長持ち鉄み箱 ソーレ 船に着物もどっさりと
ソーレ それだけ持たせてやるからにゃ ソーレ 二度と帰ると思うなよ ソーレ そ
こで娘の言うことにゃ ソーレ 父さん母さんそりゃ無理よ ソーレ 千石積んだる船
でさえ ソーレ 西が曇れば雨とやら ソーレ 東が曇れば風とやら ソーレ 港を出
るときゃまともでも ソーレ 風のナヨーエ吹きよでヨーイソーレ 出て戻るヨ ソー
ラヤートコセ エエヨーイヤナ ソリャ ハリバンヨーイ コレバンヨイ ソラヤー
イートセ

◎歌い手（昭和 52 年生）

サーヨーイナーエおまえ百までヨ ヨイヨイ エーわしゃ九十九までヨ サーヨーイセ
ーコラセ ソーリャともに白髪のヨーイソーレ 生えるまでヨ ソーラヤートコセ エ
エヨーイヤナ ソリャ ハリバンヨーイ コレバンヨイ ソラヤーイートセ

サーヨーイナーエ鯉の瀧登り ヨイヨイ エーなんというて登るヨ サーヨーイセーコ
ラセ ソーリャお水恋しとヨーイソーレ いうて登るヨ ソーラヤートコセ エエヨ
ーイヤナ ソリャ ハリバンヨーイ コレバンヨイ ソラヤーイートセ

サーヨーイナーエ行たら（いたら）見てこいヨ ヨイヨイ エー名古屋のお城はヨ サ
ーヨーイセーコラセ ソーリャ金の鯨ヨーイソーレ 雨ざらしヨ ソーラヤートコセ
エエヨーイヤナ ソリャ ハリバンヨーイ コレバンヨイ ソラヤーイートセ

◎歌い手（昭和 52 年生）

サーヨーイナーエ恋し恋しとヨ ヨイヨイ エー鳴く蟬よりもヨ サーヨーイセーコ
ラセ ソーレ鳴かぬ蜩がヨーイソーレ 身を焦がすヨ ソーラヤートコセ エエヨー
イヤナ ソリャ ハリバンヨーイ コレバンヨイ ソラヤーイートセ

サーヨーイナーエタべ見た夢は ヨイヨイ エー目出たいヨ夢だヨ サーヨーイセーコ
ラセ ソーレ真白き鼠が三（みつ）連れて ソーレ 三つ（みつつ）連れて六（むつ）
連れて ソーレ 小判くわえて金倉（かなぐら）へ ソーレ 入るナヨーエところをヨ
ーイソーレ夢に見たヨ ソーラヤートコセ エエヨーイヤナ ソリャ ハリバンヨー
イ コレバンヨイ ソラヤーイートセ

サーヨーイナーエ家（うち）の床の間の ヨイヨイ ソーレかけたる掛け軸梅の木に ソ
ーレ 梅の木鶯巣を作り ソーレ 十二の卵を産み揃え ソーレ 十二が一度に目を覚
まし ソーレ 十二が一度に立つときは ソーレ 金銀盃酒注（つ）いで ソーレ 飲
めよ大黒さん ソーレ 歌えよえべすさん ソーレ 中でナヨーエ酌するヨーイソーレ
福の神ヨ ソーラヤートコセ エエヨーイヤナ ソリャ ハリバンヨーイ コレバン
ヨイ ソラヤーイートセ

◎歌い手（平成 3 年生）

サーヨーイナーエ立てば芍薬ヨ ヨイヨイ エー座ればヨ牡丹ヨ サーヨーイセーコ
ラセ ソーリャ歩く姿はヨーイソーレ 百合の花ヨ ソーラヤートコセ エエヨーイ
ヤナ ソリャ ハリバンヨーイ コレバンヨイ ソラヤーイートセ

サーヨーイナーエ蒸気波の上 ヨイヨイ エー汽車鉄の上でヨ サーヨーイセーコラセ
ソーレ雷様は雲の上 ソーレ 浦島太郎は亀の上 ソーレ 猫の色事屋根の上 ソーレ
あなたとナヨーエわたしはヨーイソーレ 寝床の上ヨ ソーラヤートコセ エエヨーイ
ヤナ ソリャ ハリバンヨーイ コレバンヨイ ソラヤーイートセ

サーヨーイナーエ紀州紀の国は ヨイヨイ エー名所のヨ国だヨ サーヨーイセーコ
ラセ ソーレ音に名高き和歌山城 ソーレ 遙かに眺むる生石山 ソーレ 中に花咲く
温山荘 ソーレ 花は桜の紀三井寺 ソーレ ちりりて流れる紀ノ川へ ソーレ 北は
和歌浦南には ソーレ 日本一なる那智の滝 ソーレ 朝な夕なの陽を浴びて ソーレ
紅葉映すか瀬八丁 ソーレ 金波銀波の波越えて ソーレ 三段壁（べき）なら白浜で
ソーレ かもめ遊ぶか田辺湾 ソーレ 千鳥通うか鰹島 ソーレ 高野（こうや）の峰
より日高郡 ソーレ 百十万は梅の里 ソーレ 男紀文は蜜柑船 ソーレ 黒潮寄せる
日の岬 ソーレ 煙たなびく煙樹ヶ浜（えんじゅはま） ソーレ 安珍恋しや道成寺 ソ
ーレ 恋に身を焼く清姫の ソーレ 燃えてナヨーエ流れるヨーイソーレ 日高川ヨ
ソーラヤートコセ エエヨーイヤナ ソリャ ハリバンヨーイ コレバンヨイ ソラ

ヤーイトセ

ヨーイヤッサイ
ヨーイヤッサイ
ヨーイヤッサイ